

海外交流と北米拠点の役割について



海外交流

山本 ベバリーアン*

International Engagement and the Evolving Role of the North American Center

Key Words: International Engagement, Global Partnerships, North American Center, Academic Collaborations, Innovation Ecosystems

本稿では、「海外交流」というテーマのもと、ベイエリアにおける本学の北米拠点の活動について考えてみたいと思います。私は現在、大阪大学北米拠点（パークレー）にて拠点長を務めており、駐在ではなく出張ベースで活動しています。年間の約4か月を現地で、残りを大阪で過ごす中で、いくつかの気づきを得ました。

まず、北米拠点という「場所」についてです。本学においても、北米拠点の存在が必ずしも広く認識されているとは言えず、ある意味では「存在しているが、十分に可視化されていない」資源であるとも感じています。

① 場所としての北米拠点

日本では「立地が重要」とよく言われますが、この考え方は海外拠点にも当てはまります。どこに拠点を置くかは、何が可能になるかを大きく左右します。本拠点は2004年にサンフランシスコに設置された後、2019年にパークレーへ移転し、現在はカリフォルニア大学パークレー校のスタートアップ・インキュベーターであるSkyDeckに入居しています。他の海外拠点とは異なり、学术交流に加えて、シリコンバレーのベンチャーやイノベーションのエコシステムとの接続も期待されてきました。



* Beverley Anne YAMAMOTO

1959年11月生まれ
英国生まれ、教育は高等教育まですべてイギリス
現在、大阪大学国際機構海外拠点部門特任教授 北米拠点拠点長 人間科学研究科名誉教授
専門：社会学、社会政策、地域研究
2000年2月 University of Sheffield博士課程(東アジア研究)取得
TEL：06-6879-4596
E-mail: yamamoto.beverley.iii@osaka-u.ac.jp

ベイエリアは、カリフォルニア大学パークレー校やスタンフォード大学を中心に、学術と技術革新が高度に集積する地域です。ここで生み出される技術は、私たちの生活や社会のあり方に大きな影響を与え続けています。好むと好まざるとにかかわらず、その影響の大きさは否定できません。

しかし、この場所に身を置くことには一種の緊張も伴います。物理的に近いことが、そのまま関係性の中に入れることを意味するわけではありません。本学は日本やアジアでは高い評価を得ていますが、米国においては必ずしも同様ではなく、存在を認識され、議論に加わるためにはより一層の努力が求められます。

この一年を通じて感じているのは、この環境には「光」と「影」の両面があるということです。光とは、ベイエリアが持つエネルギーである。ベイエリアの持つエネルギー、絶えず新しいものが生まれるダイナミズムは大きな魅力であり、その流れの中に身を置くこと自体に意味があります。しかし、巨人たちの隣に立つとき、その光は時に遮られることもある。関係性と資本が強く作用するこの環境の中で、日本の大学が従来のペースのままに対応することには難しさもあります。

したがって問われるのは、単に「そこに存在すること」ではなく、「どのように関与するか」という点です。

② 関係性の構築

次に、「関係性の構築」についてです。本学の研究力や国際的評価は重要な基盤ですが、それだけで連携が進むわけではありません。外からは、国際連携は互いに価値を交換するような取引的な関係に見えるかもしれませんが、実際にはまず関係性の構築が先にあります。

特に印象的だったのは、関係性が必ずしも会議室で形成されるわけではないという点です。カリフォルニアやネバダ、テキサスでは、歩きながら、あるいは移動しながら対話を重ねることが多くあります。サンタバーバラの海岸を歩きながら、あるいは街を案内され、コーヒーや抹茶スムージーを手にしながら、互いの考えや課題、今後の方向性について率直な議論が行われます。

ネバダ大学リノ校のタホキャンパスを訪問した際には、キャンパスだけでなく学生が日常的に接する周辺環境も含めて案内を受けました。車で各地を移動したが、使われていたのはまるで当然のようにテスラ車だった。そうした点にもこの地域らしさが表れていますが、その移動時間自体が対話の場となっていました。最後に立ち寄ったのは、いわゆる洗練されたカフェとは対照的な、どこか「ローカル感」の強い素朴なコーヒーショップでした。そうした場所こそ、より率直で地に足のついた議論が生まれることを実感しました。

このように空間を共有しながら対話することで、発想が柔軟になり、信頼関係が自然に形成されていきます。並んで歩く、あるいは同じ方向を見ながら話すことで、より率直で探究的な対話が可能になるのです。



ネバダ大学リノ校で開催された日本関心者向け公開イベントにおける大阪大学の紹介

③ 既存ネットワークの活用

一方で、すべての関係を一から築く必要はありません。バイエリアには、Japan Society of Northern California、JETRO、JSPS、在外公館など、日本に関係する組織のネットワークがすでに存在してい

ます。これらは関係構築の重要な入口となります。

実際に、Japan Society of Northern Californiaのガラに参加した際には、産業界、学术界、文化分野など多様な関係者が一堂に会していました。会場の窓の外には、日本のアニメが描かれたANAのボーイング787が駐機しており、日本の技術力と文化的影響力の広がりを象徴する印象的な光景でした。日本の存在は確かにそこにありますが、それをどのようにつなぎ、広げていくかが問われています。

④ 橋渡しの役割

最後に、「北米拠点の橋渡しの役割」について触れたいと思います。このような環境では、異なる制度や文化をつなぐ役割が重要になります。これは単なる語学力ではなく、アメリカ、特にカリフォルニア特有のコミュニケーションのあり方に対する理解と適応力を含みます。同時に、自らの所属機関の戦略的方向性を理解するだけでなく、バイエリアや米国全体の動向を踏まえた戦略的な関与が求められます。また、議論された内容が実際の行動につながるという信頼感も、関係を深める上で重要な要素となります。

このような文脈において、北米拠点は、人や組織をつなぎ、関係を具体的な形にしていく接点として機能することが期待されます。



基礎工学部の学生のバイエリア研修

海外拠点の活動は、限られた資源や制度の中で運営されるものであり、その価値が必ずしも分かりやすい形で現れるとは限りません。

しかし本稿で述べてきたように、「海外交流」は単なる拠点の設置ではなく、人と人、組織と組織をつなぐプロセスそのものに意味があるのではないかと感じています。

北米拠点もまた、そのようなつながりを生み出す場として、今後も静かではありますが着実に役割を果たしていくことが求められているのだと思います。

